

# 蔵の家 - 京都祇園の酒蔵・土蔵の改修 -



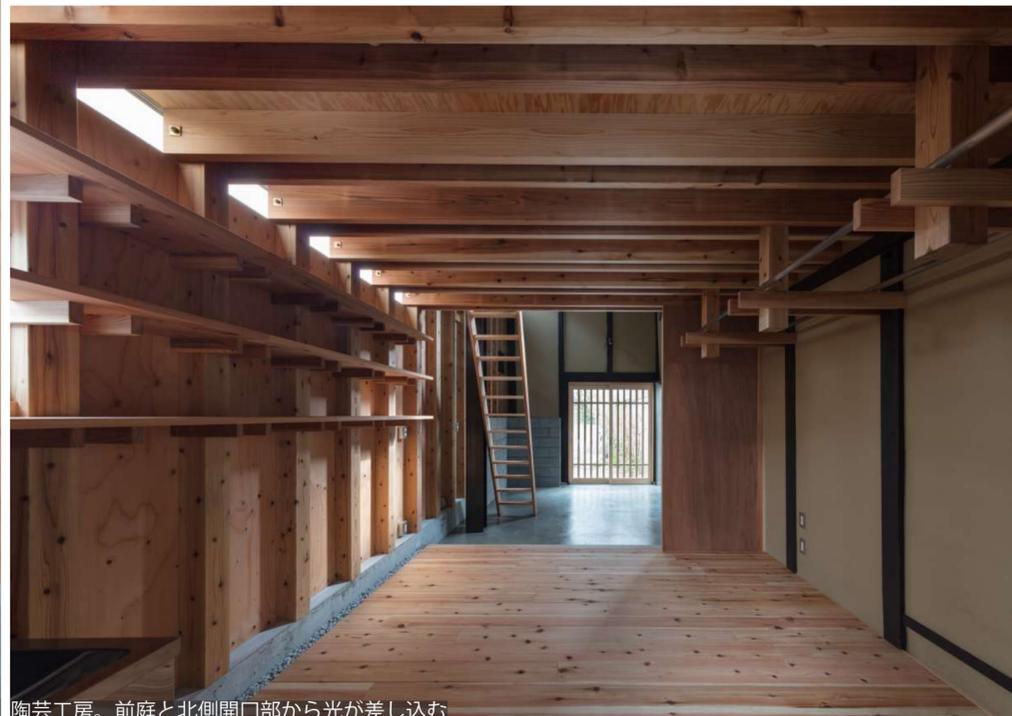
陶芸工房（元酒蔵）内観。新旧の構造が混じり合った空間



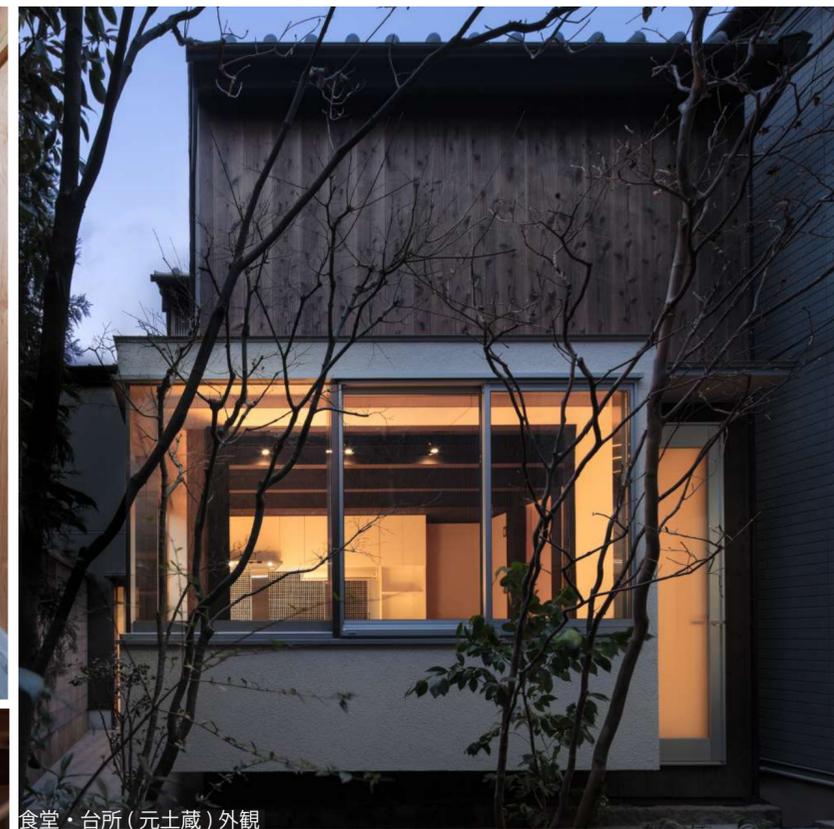
陶芸工房。455mmピッチの通し柱と挟み梁



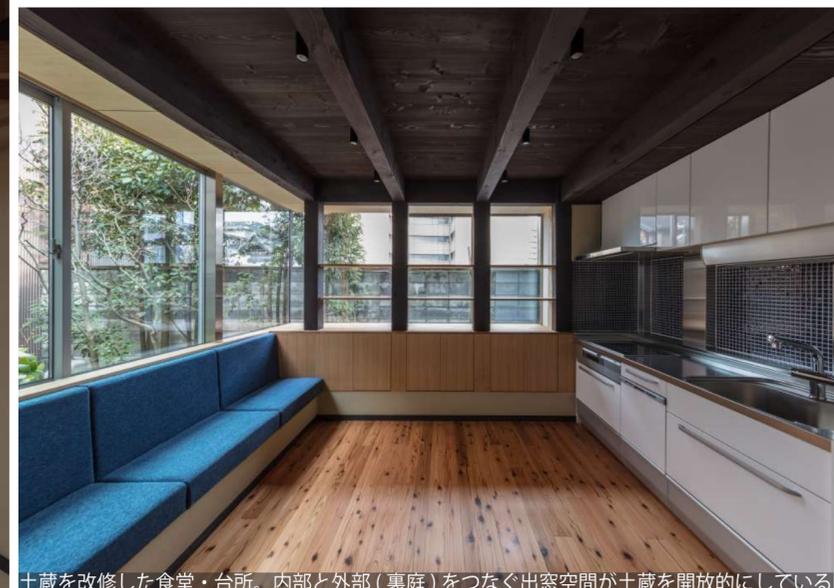
陶芸工房。前庭と裏庭を繋ぐ筒状の空間



陶芸工房。前庭と北側開口部から光が差し込む



食堂・台所（元土蔵）外観



土蔵を改修した食堂・台所。内部と外部（裏庭）をつなぐ出窓空間が土蔵を開放的にしている

## -計画概要-

京都祇園に位置し、先祖が江戸時代以降順次建てた元酒蔵の建物群を、既存の架構をなるべく活かしながら、陶芸工房兼住まいに改修した計画である。

陶芸工房として使われる元酒蔵は、コンクリートブロック塀兼外壁を撤去し、通し柱と挟み梁による架構を新たに設け、隣接する離れと梁でつなぐことで建物群全体の構造補強をしている。自立を要求される北側の壁を構成する柱は、元酒蔵の既存柱と同様全て通し柱とし、梁は南側の「離れ」の既存柱と繋げられるよう「挟み梁」の構造形式を採用し補強を実現した。通し柱を壁に配置し、桁をなくすことで本来桁がある高さから陶芸作業に適した自然光を取り込んでいる。

また食堂・台所として使われる二間四方の土蔵は、既存の柱や梁を残しながら、内外部の中間領域としての出窓空間を新たに付加することで、あまり利用されていなかった裏庭と一体に感じられる広く明るい内部空間を生み出した。

このように、建立年代の異なる複数の棟が互いに依存し寄り添いながら形成されていた複雑な構造を、可能な限り自然、かつ合理的な方法で「接ぎ木」のように補強、改修することによって、この計画独自の新旧の建築エレメントが混じり合った空間が実現されている。

## -設計趣旨-

### 自己模倣と用途変更から生まれる誤読的復元

酒蔵で使われていた通し柱の形式を、新しい陶芸工房でも踏襲したのは、酒蔵の名残を残して欲しいという住人の願いであり、そのような個人的な願いの集積及び積み重ねが京都の文化を醸成すると考えている。

そこで蔵の形式は遺伝することを前提としつつ、時代が移り用途が変更すること等による既存とのズレを利用して、誤読的な復元計画を行った。

### 接ぎ木のような建築エレメント

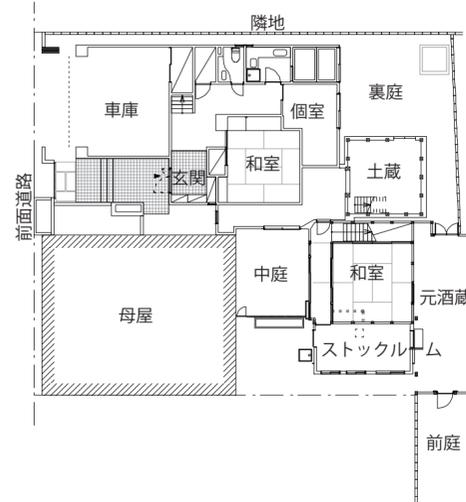
既存の建築のエレメント（部材）を詳しく調査・観察し、今回計画する建築と、どのように接合すれば互いの組織がうまく癒合し、引き続きこの建築が時間を重ねていくのかを考えた。新旧のエレメントが対比するのではなく、時間をかけて同化していくことを意識した。

規模 : 2階建119.59m<sup>2</sup> (改修範囲)  
 機能 : 陶芸工房+戸建住宅  
 構造形式 : 在来木造  
 設計期間 : 2016年4月-9月  
 工事期間 : 2016年10月-2017年2月

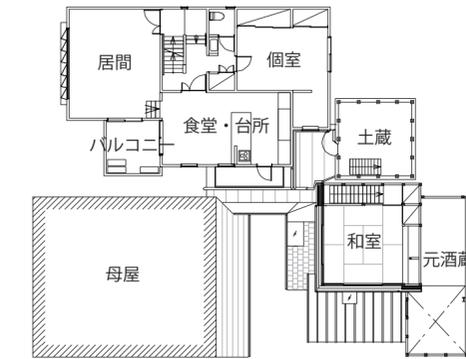
- 1 土蔵 江戸時代
- 2 離れ（和室） 大正～昭和初期
- 3 元酒蔵 戦後
- 4 ストックルーム 昭和後期



航空写真（附近見取）

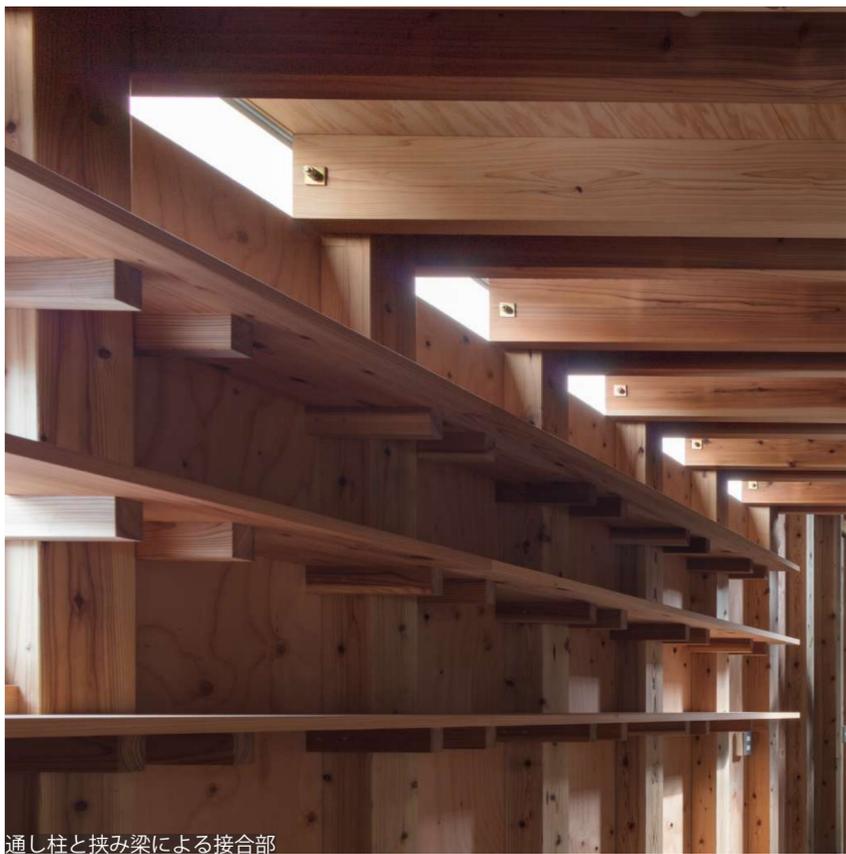


既存1階平面図 S=1/250



既存2階平面図 S=1/250

KU\_013



通し柱と挟み梁による接合部



北側からの柔らかな自然光を取り込んだ作業場



工房2階から前庭を見る



ジベル構造がせん断力を伝達する



離れ床の間の片持ち梁を支持する束材



食堂・台所(元土蔵)西側の裏庭を見る



陶芸工房ろくろ場から土間を見る



ろくろ場から北側開口部を見る



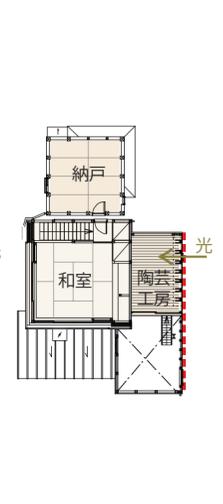
既存の鉄製材をかわすために採用した挟み梁



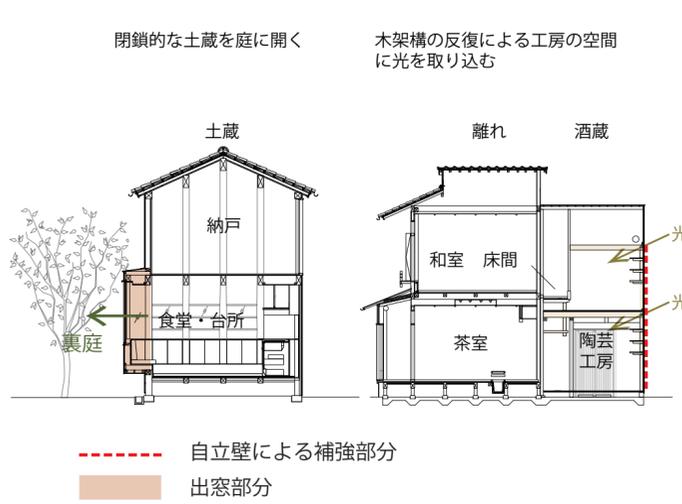
かつての酒蔵が陶芸工房として利用されている



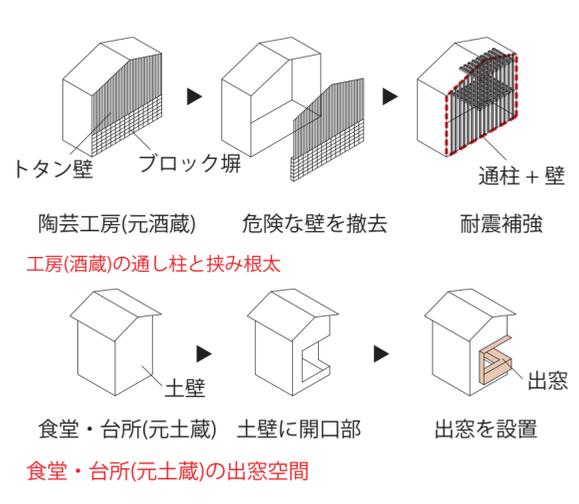
1階平面図 S=1/250



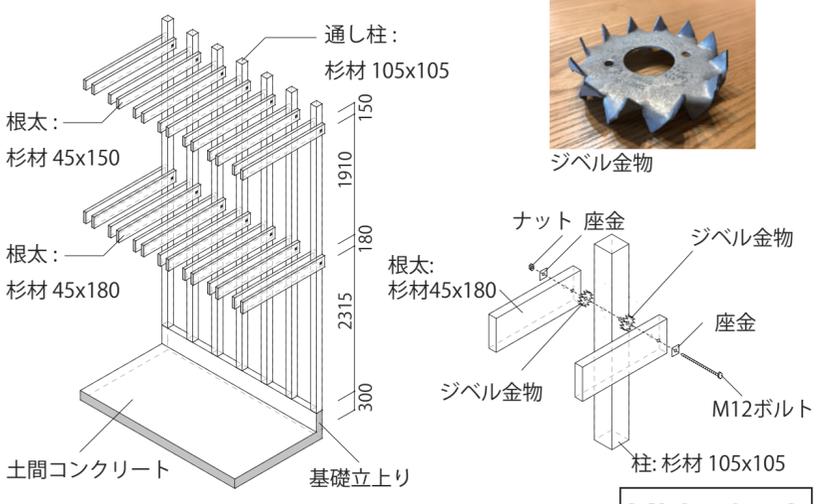
2階平面図 S=1/250



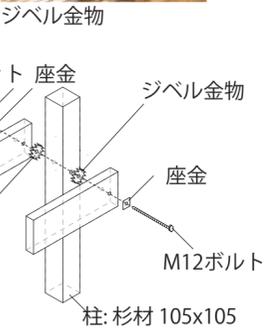
土蔵断面図 1/150 酒蔵・離れ断面図 1/150



構成ダイアグラム



陶芸工房 構造アクソメ図 挟み梁詳細



KU\_013